

森の通信

宮崎県総合博物館だより

第20号

Museum and Cultural Institutions of Miyazaki Prefecture

発行日/平成6年7月13日

発行 / 宮崎県総合博物館 〒880 宮崎市神宮2丁目4番4号 TEL (0985) 24-2071

——色彩と文様が織りなす古代人のメッセージ——



特別展 装飾古墳の世界

いよいよ8月13日(土)から!



福岡県日ノ岡古墳の壁画(復元図)(6世紀前半)



福岡県珍敷塚古墳の壁画(復元図)(6世紀後半)



奈良県高松塚古墳西壁女子群像模写(7世紀末)

“古墳”を身近に感じることの多い宮崎の私たちにとっても、“装飾古墳”はなじみの薄い言葉です。でも、あの“高松塚古墳の壁画”をイメージすればよくわかるかもしれません。高松塚古墳の壁画のように墓の中の壁や石の柩をあざやかな色彩や線刻画、浮き彫りで飾る古墳をとくに“装飾古墳”とよんでいます。これは、紀元6世紀ころに全国各地に広がりました。今回の展示会は、開館10周年を迎えた国立歴史民俗博物館の企画になるもので、普段は保存のために立ち入ることのできない古墳の石室の中を実物大の模型で再現し、日下八光氏(東京芸術大学名誉教授)の描く壁画模写や出土遺物などで、古代日本人

の考え方や美意識に迫ります。とくに、素朴ななかにも圧倒的な迫力でせまる高松塚古墳以前の壁画は必見です。また、本県の装飾古墳もあわせて紹介します。(近藤)

会期 平成6年8月13日(土)▷9月11日(日)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日—毎週月曜日(8/22・8/29・9/5)
ただし、8/15は臨時開館

入館料 大人 900円(700円)
高・大生 600円(400円) ※()内は、団体(20名以上)の料金
小・中生 400円(200円)

水辺に輝く星 ホシクサ類

ホシクサ類はきれいな水辺の湿地に生える小型の草で花が星の形に似ているのでホシクサ(星草)といいます。

日本には40種ほどがあり、これまで宮崎県には11種が確認されていました。これらホシクサ類は水の汚染や湿地の開発により生育地が次第に少なくなっています。すでに絶滅したものもあり、宮崎県特産であったヒュウガホシクサも姿を消してしまいました。

こんな中で、昨年度の本館の調査研究により宮崎県新産が5種も見つかりました。そのうち3種は世界でも初めての新種であることが分かり、それぞれ「クロヒナホシクサ」「ホウキボシイヌノヒゲ」「エダウチシロホシクサ」という名前が付けられました。

このコーナー展はこれらの新種紹介を中心に、次の5部で構成されています。

- ①ホシクサとは
- ②発見された3新種の紹介
- ③宮崎県産ホシクサ類
- ④日本産の絶滅危惧のホシクサ類
- ⑤世界の珍奇なホシクサ類

このうち、②では自生地の様子、花の拡大写真、解剖ペン画、標本をセットで展示しています。③では全標本と自生地の写真を、④では絶滅種のヒュウガホシクサのレプリカ(実物そっくりに作ったもの)と東京大学所属の写真を入れて、入れています。特に③④の写真は東京大学資料館に出向いて撮影した貴重なタイプ標本の写真が入っています。このようなホシクサ類だけの展示は日本でもはじめてではないかと思われます。(南谷)



展示の全景



ホウキボシイヌノヒゲ
(新種)



エダウチシロホシクサ
(新種)

西都原資料館コーナー展

都

萬焼

西都市大口川で焼かれていた陶磁器です。大正初期、妻町(現在の西都市の中心部)の河野藤太氏(第5代)によって開かれた、大型の登り窯で焼かれました。陶工の富金原菊一氏は、島根県岩見の陶工でしたが、河野氏に招かれて、家族と共に大口川に移住しました。

製品には、すり鉢、壺、甕、徳利、手洗い鉢をはじめ花瓶や植木鉢などがあります。人びとの日常生活の中で広く愛用され、70有余年を経た現在もなお、用いられているものがあります。

河野氏がなくなった大正7年を境に、焼かれる種類・量が減っていきました。さらに大正10年、全県下に販売路をもっていた河野家が製造・販売を富金原氏に任せ後は、『土管焼』と呼ばれ、窯周辺の地区で必要とされる土管作りが多くなりました。これは、富金原氏のなくなった昭和17年まで焼かれています。

この展示では、これら都萬窯で焼かれた多くの生活雑器の中から、現在残る都萬焼の代表的な品々を、大正7年当時の都萬窯の写真とともに紹介します。人々の暮らしの改善や向上に貢献した姿を見ることができます。

なお、今回の展示にあたり御協力いただいた河野博光氏に、感謝申し上げます。(清水)

【展示期間：～平成7年2月12日(日)】



「舞子」 塩月桃甫

この作品は塩月桃甫が1949(昭和24)年に描いた代表作「舞子(まいこ)」です。

桃甫は、1886(明治19)年2月27日、三財村(現西都市)の長野家の四男(長野善吉)として生まれました。宮崎師範を卒業後、美々津で教職についている時に塩月家の養子となりました。その後、1907(明治40)年には東京美術学校に入学し、同校を卒業後、大阪や松山で小学校や師範学校の教職につきながら制作に励みました。

1921(大正10)年、35歳の時、中学校と高校の教諭として台湾に渡り、教鞭をとりながら同地の風物などをテーマとして多くの作品を描きました。また、桃甫は、台湾美術展の開催に尽力し、18年間も同展の審査員を務めるなど、台湾美術の指導的役割を果たし、台湾美術の振興に大変貢献しました。

終戦の翌年の1946(昭和21)年、作品のほとんどを台湾に残して宮崎市に引き揚げました。その後も桃甫の制作意欲は衰えず、鮮烈な色彩と強烈なタッチで宮崎の風物を描きました。

「舞子」は桃甫63歳の時に描かれた油彩画で、フォーヴィスムの影響は感じられるものの、桃甫のデッサン力の確かさを示す作品となっています。年齢を感じさせな



舞子

い力強い筆触と生涯使い続けた赤や緑の鮮やかな色彩で、清純な感じの舞子をさわやかに描いています。この作品をはじめとして、彼のみずみずしい作品群は、時代を隔てた現代においても、私たちを魅了し続けています。

1954(昭和29)年病没(68歳)

(高橋)

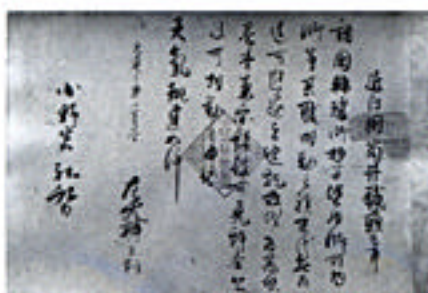
木地師文書

明治時代以前の日向には、豊富な材を生かして、椀や盆などの木地を作る人々がありました。

西臼杵郡五ヶ瀬町には、先祖代々、受け継がれてきた木地師用具や木地師文書が大切に残されています。



木地師文書「承平五年十一月九日」



木地師文書「元龜三年十一月十二日」



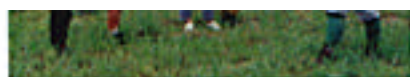
木地師文書「天正十一年六月」



木地師文書「天正十五年十一月十五日」

仕事の様子やその価値を広く紹介するために、今回、文書資料の複製製作を行いました。

これらの文書は、木地師の伝統や誇りなどの歴史的背景を示す好資料であり、現在のところ本県で確認されている唯一の木地師関係の文書です。(地村)



自然観察会に参加した皆さん

8月28日(日)	標本の名前を調べる会	夏休みに採集した草花・昆虫・岩石について名前を先生と一緒に調べます。
----------	------------	------------------------------------

8月から10月の催しもの

	8月	9月	10月
◆特別展	8/13 装飾古墳の世界 9/11		
◆コーナー展示			
自然史	水辺に輝く星 — ホシクサ類 —		10/2 10/6 草原にすむ生き物たち
考古	経塚 — 埋められた経典 —		
歴史	宮崎の歴史をつくった人々 — 石井十次 —		
民俗	いろいろな器		
埋蔵文化財センター	発掘調査速報展	9/25 9/28	三幸ヶ野遺跡の調査
西都原資料館	馬具		10/10 10/13 装身具
	都 萬 焼		
◆普及活動			
●博物館	森の学習会 — 8/20「装飾古墳の世界」 9/21「水辺に生きる植物たち」 10/17「西都原周辺の民俗」 博物館自然教室 — 8/28「採集作品の名前を調べる会」 9/20「野外調査会」 動く博物館 — 10/26～11/6「北郷町」		
●県民文化ホール	森の名画座 — 8/28「南極物語」 森のコンサート — 8/6「東京芸大生による音楽の夕べ」 10/22「アンサンブルの夕べ」		
●埋蔵文化財センター	埋文講座 — 8/27「弥生時代の宮崎Ⅰ」 9/24「弥生時代の宮崎Ⅱ」 10/22「三幸ヶ野遺跡の調査」		